

チ。11月シマサルナシ、コバノフユイチゴ、モチノキ。12月カクレミノ。1月タイミンタチバナが出現する。9月から1月に出現するヒサカキが一番安定し、次いで1月から3月のタイミンタチバナである。量の多いのはホウロクイチゴ、ヒサカキ、タイミンタチバナであった。上、下共通種は上部域のヤクザル垂直移動の可能性を示している。種子以外については十分な検討を加えていないが、上部域で昆虫出現率が高く、繊維質が多く検出される。キノコ類の出現時期に、上、下で相違が認められる。上部で2、3月に多く、下部では4月に多く認められる。いずれも種子の非常に少ない季節であり、キノコ食がこの時期に集中する意味は今後の検討課題の一つである。

ヤクニホンザル自然群における、ワカオスの社会関係

鈴木 滋 (京大・理)
塚原高広 (東大・理)

'88年7月から8月にかけて屋久島西部海岸においてニホンザル自然群の社会学的調査を行った。

I ヒエンド群の構成

近年観察がとぎれていたヒエンド群について、その構成を確認し、人付けを回復した。また以前の調査時に作成された家系図を、オトナメスを中心として継続することができた。現在集中調査を継続中の3群のうち2群と、ヒエンド群とは隣接しており、この調査により連続5群の構成が明らかになった。これらの情報は、オスの移籍、人口学的問題、集団間関係等の、通時的、社会学的研究に不可欠な基礎資料となる。

II アルク群におけるワカオスの社会関係

アルク群のオス7頭(オトナオス4頭、ワカオス3頭)を個体追跡し、おもに敵対的交渉とグルーミングにかかわる交渉を分析した。

オス間には、直線的順位が認められ、オトナオスがワカオスより優位である。ワカオス-メス間では優劣が不明瞭である。オトナオスがメスに優位表出をするのは、自分よりも優位なオスの近接しない場合だが、ワカオスは、自分よりも優位なオスが近接していても、メスに優位表出を試みる。メスはワカオスの優位表出を認めず、反撃することが多い。また、ワカオスは優位なオスの近接し

ていない状況でも、メスを避けることがある。

オスは、オスとのグルーミングよりも、メスとのグルーミングを志向する。オトナオスのグルーミングは、メスが相手のものがほとんどを占め、かつメスの接近でグルーミングが始まり、オスの退去で終わる場合が少なくない。それに対して、ワカオスは、メスとグルーミングをかかわすことは少なく、しかも、ワカオスの方から積極的にメスに接近してグルーミングし、メスの退去で終わることが圧倒的に多い。

以上の結果から考察すると、社会的に未成熟なワカオスは、その未熟さゆえに、メスからオトナオスとは区別して扱われることが多く、またみずからそういう状況におちいる傾向が強い。その結果、ワカオスは、基本的には群れの一員としてのステータスを志向しつつも、つきあう相手を限定されることになり、社会構造上の“周縁部”に位置することになるのだろう。

課 題 6

聴性脳幹反応による霊長類の聴力曲線の作成と直接電氣的記録との比較

鎌田 勉・亀田和夫(北大・歯・生理)

反応時間測定による行動学的な聴力曲線をとると、ニホンザル(およびチンパンジー)では、2および8kHzの間の周波数の音に対して閾値が低い部分が生じ、いわゆるW字型の曲線となる。これを電気生理学的に検証するために、聴性脳幹反応(ABR)、蝸牛マイクロホン電位(CM)、複合活動電位(AP)を記録して閾値を求めようとした。ニホンザル延べ5頭からABR、CMまたはAPを、日本光電社製Neuropack IIを使用して記録した。ABRはヒトに準じて頭頂・耳だ間の電位を2048回加算して得た。CM、APは銀ボール電極を鼓膜の近くに電極のりで固定し、それぞれ128回、または512回加算して得た。ニホンザル1頭について直接、CM、APを正円窓に銀ボール電極を置いて記録することを試みた。これは術中、耳小骨を破損して正確なデータを得ることができなかった。

ABRの結果は1、2、4、6、8kHzでの閾値が8回測定の平均で58.7、44.4、49.4、54.4、41.9dB SPLであった。このように閾値は8kHzで

最も小さく、次に2kHzで、その間では閾値は高く、行動反応による閾値と相応した。CMの閾値は10回測定平均で2kHzでもっとも低く6kHzでは高かったが、8kHzの閾値は6kHzより低いのが最低ではなかった。11回測定平均のAPでも同様であった。ABRでは90dB SPL または80dB SPLの刺激音に対する反応は8kHzでは他の周波数より小さかったが、閾値は低くなった。8kHzのABR反応が弱い音に対してもCM、APより残存する傾向にあるのはABRはCM、APより上位、中枢側でみているためかもしれない。ABR、CM、APとも6kHzでの閾値は他より高い傾向がみられ、反応の電位の大きさも小さく、行動学上のオーソグラムと相応した。

さらに、直接正円窓等からの反応を記録するか、聴神経のユニット反応を記録してこの事実を確実にすることが必要であろう。

聾長類における聴神経直接電気刺激による情報伝達に関する研究

伊福部 達 (北海道大学応用電気研究所)

松島 純一 (北海道大学医学部耳鼻科)

耳小骨除去により難聴にしたニホンザルの内耳に電極を設置し、残存する聴神経に直接電気刺激を与えることにより、聴神経がどのように応答するかを誘発電位に基づいて調べた。刺激電極としてはPt-Ir線をうい蝸牛管の正円窓膜に設置した。約4カ月後に、埋め込み電極を介して電流刺激を与え、同時に同じ電極から誘発電位を検出した。ただし、対極は耳介である。まず、100 μ sの持続時間を持つ電流パルス刺激を与え誘発電位の閾値を求め結果、閾値は約30 μ Aであることが分かった。また、電流刺激に対するダイナミックレンジは約10dBであることが分かった。最大の誘発電位は約10mVで潜時は約5msであった。これらの値は難聴者の正円窓膜に電極を設置して得られる値とほぼ一致していた。以上の結果を得たので、今後は色々な時系列刺激を与え、それに応答する誘発電位からサル末梢聴神経におけるコーディング機構を解析していきたい。

課題 7

2重標識法を用いた、側頭葉MT野と前頭連合野と頭頂連合野の間の神経回路の研究

有国富夫・酒匂裕子 (日大・医)

本研究では、神経細胞および神経線維終末を標識する物質にレクチン付加わさびペルオキシダーゼ(WGA-HRP)と蛍光色素のフルオロゴールドを用いた。WGA-HRPを標識物質としてサルの脳に使う場合の使用方法は分っているが、新しく開発されたフルオロゴールドがサルの脳の神経細胞を逆行性標識する場合のパラメーターおよび神経線維終末を順行性標識する場合のパラメーターは知られていない。そこで、本年度の研究では、フルオロゴールドの注入濃度と量、および色素注入から脳を取り出すまでのサルの生存期間について検討した。2%濃度のフルオロゴールドを0.3 μ l、前頭眼野の8野に注入、サルを1週間生存させるとフルオロゴールドで標識された神経細胞と神経終末は注入部の近傍と運動前野(6野)の吻側部すなわち弓状溝の後壁に出現した。したがってフルオロゴールドは脳内距離で4mm軸索輸送されたと推定された。フルオロゴールドの濃度を4%に上げ、同じく8野に0.3 μ l注入、サルを3週間生存させた実験では、標識神経細胞と標識神経終末が、大脳半球内側縁に近い6野領域にも現われた。しかし運ばれたフルオロゴールドの量は少く、蛍光は微弱で蛍光顕微鏡による観察は容易でなかった。この例ではフルオロゴールドの軸索輸送の距離は約10mmと推定された。しかしこの程度の軸索輸送距離では、サルの脳の皮質-皮質間結合を検索するには不十分である。フルオロゴールドをサルの脳の神経回路研究に適用するパラメータについて、さらに実験が必要である。

なお、本来の研究目的ではなかったが、頭頂連合野のPG野(7野)にWGA-HRPを注入したサルにおいて、同側の側頭葉の側頭極(TG野)とこれに隣接する聴覚連合野のTSI野にHRP標識神経細胞とHRP標識神経終末が出現した。このことは、側頭葉の吻側部と頭頂葉のPG野の間に双方向結合があることを示す。これは未報告の神経回路である。